昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十二年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二二一号）

池山先生特揖号

絶対他力と体験

目次

苦悩……（衆生）……(1)
救済……（如来）……(7)
信仰……（仏凡一体）……(12)
相続……（信的生活）……(19)

慈光

第十九巻　第十号

絶対他力と体験

池山栄吉

苦悩（衆生）

一、苦に逼られて

私達ははいつも楽を追うている、そして、いつも苦に逼られている。

胸まで水に浸りながら、かがんで水を飲もうとすると、スーッと波がひいて行って、追う口辺にかえって来ない。頭の上にしだれかかる満朶の木の実を採ろうとすると、ドッと風が吹いてきて、枝をたわめて手がとどかない。飢渇になやむタンタルスは、そのまま私達のことではないか。

樹の上で流し目する美女にあこがれて、刀のような鋭い葉に、肉を割かれ筋を断たれて、ようよう樹頭に昇ったとおもえば、彼の美女はいつのまにか下に居て、嬌態をつくって喚んでいる。またもや全身をつんざかれて、下に降りれば上にいる。刀葉林の罪人は、現に私達のことではないか。

二、求めてやまぬ

私達は求めて止まないものだ。

隴（ろう）を得て蜀（しょく）を望むとは、すでに増長を極めた沙汰だが、蜀を得ればまた何かを望むにきまっている。

日吉丸が木下藤吉郎となり、羽柴秀吉となり、豊臣となり太閤となって、仮りに其上の出世を望まなかったとしても、すくなくとも、わが亡き後に世嗣、秀頼が、よく現状を維持することが出来て、諸国大名の牛耳を取って行けるようと望んだに違いない。

三、それからそれ

何か会でもあって御馳走が出るとする。西洋料理ならば通例まずソップが出る。次にはフライの出るのがきまりだ。さてその次には、シチューだのオムレッだの、さてはカツレツ、ビフテキなど、だんだん出たあとで、大抵腹が一杯になった時分、最後にサラダを台としたさっぱりしたもの

が出る。それから今度は後餐（デセール）に入って、菓子が出るコーヒーが出る、果物が出る。無論、ビール、ブドウ酒、シャンペンなど、色々の酒は初めから出ている。

日本料理でもそれぞれ凡そ順序があって、なかなか沢山の品数が出る。上等の支那料理などになると、それが一層多いそうだ。

そもそも料理の献立は、要するに食欲の欲求を連続的に具象したもので、人々が食事に際して、それからそれと求めて行く有様は、それで分明に看取される。

さて、いよいよ御馳走がすんで、食欲の欲求がひとまずかたがついたと思うと、今度はさらに、囲碁、将棋、トランプ、玉突、音楽、舞踏、曰く何、曰く何と、さまざまの娯楽的欲求が、あとからあとからと起こってくる。

そしてそれをみたしつついく間にも、機会だにあれば抜目なく、愛を求め、利を求め、名を求め、勢を求め、其他あらゆる方面で、いやしくも自己の発展に益することは、ことごとく求めることは忘れない、いやはや実に忙しないものは私達の生活だ。

四、断えぬ不足

私達はいつも何か不足を感じつつあるものだ。

心にかかる雲もなく、晴れた空に月を望むような、すっきりとした好い気分にひたる刹那もないではないが、あわれそれがいつまでつずこう。上加減の湯につかっているといかにも好い気分であるが、しばらくするとのぼせて来て好いと思った心持もだんだんわるくなってくる。

好んでは常住を求め、厭いては変化を求める。万法は無常で変化はまぬがれない。変化は必然であるが必ずしも希望にそわない。

常住を求めて得ず、変化もまた意の如くにならない。そこに私達の不満がある。

五、思うようには

よしや多少の労は伴うにしても、かならず望がかなうとならば、不足のおこることもあるまい。池をかいほして魚を捕るような、なってる果実を竿で打落すような、目指すところへ半日の遠足を試みるような、それはむしろ趣味ある楽しいことであろう。

しかし世の中はなかなか思うようにはならぬ。

私達は一切を思うままにしたいと望む。物に対しても、人に対しても、はた自分自身に対しても、

もっともいくら望んでも、到底かないそうもないことは始からあきらめて、あえて望みもしないようだが、必ずしも不可能でないと認められる限りは、成就するよう望んで

やまない。が、いろいろ自然もしくは人為の障得があって一一思う通りには運ばない。

六、累反射

とりわけ自分と人と対する場合には、相手を無理に強力をもって圧倒するのでない限り、心と心との相対になる。その関係は、丁度鏡と鏡とむかい合わせたようなもので、向うの姿がこちらへうつると同時に、こっちの姿が向うへうつるばかりでない。向うにうっつたこっちの姿が、更にこっちへうつると同時に、こっちにうっつた向うの姿が、更に向うにうつる。そしてその姿が、またこちらへうつりそのこちらへうっつた姿が、また更に向うへうつると云った風に、次から次にと、幾多の累反射を影現する。

七、復写眞

累反射の結果、自然できあがるのは一種の復写眞だ。銘々の胸にかけてる人形箱から、仏ばかりが飛び出したなら、それは当然仏が現像されよう。しかし、人間は打算的だ。悪貨は良貨を駆逐する。よし一方から仏が出たとしても、他の一方から鬼が出れば、仏の方は引込んでしまう仏の顔も三度という、代って出るのは矢張り鬼だ。

いわんや私達の胸の中には、仏の面だけは用意してあるが、活きてるものは鬼ばかり、たまに入間らしい面を被ってるのがあればいい仕儀のところへ、われひとともに、お互に、相手の出方をうかがってるという始末だから、出来る写真にろくなものは滅多とない。

八、末の松山

もしも私達が真実の心をもって人にむかうことが出来るなら、人も清浄の心をもってこたえてくれよう。が、悲しい哉、私達にはその持合わせがない。一時表面をごまかしても仮面はついた剝がれるときがある。

徹頭徹尾自己中心の立場に陣取って、しかも奔放な愛憎痴慢の乗ずる所となり、とかく我が田に水を引きたがる虚仮不実が、私達の本来の面目であってみれば、それでどうして人との間に恒久の情誼がかわされよう。利害の相容れる間こそ、膠漆の交も続こうが、一朝それが相反するようになれば、打ってかわって怨敵の間柄ともなりかねない。

九、反作用

自分と相手と同じ大きさの舟に乗ってると仮定して、自分が相手の舟を押せば、相手の舟の押退けられるだけ、それだけ自分の舟も後にもどる。自分が相手の舟を引けば、相手の舟が引寄せられるだけ、それだけ自分の舟も前に乗

出す。

作用、反作用の運動の法則は、不実でおしへだて、利害で寄り近づく、人の心的交感にもあてはまる。これぞ人生五分五分の交際というもの、なんとすこぶる詩的の気韻に欠けた、あさましい現象ではないか。

十、恨綿々

たまたま親子兄弟夫婦親友などの間に、或美わしい情意の投合が見出されるにしても、その不変性は必ずしも保証されない。

のみならず困ったことにはもともと生物同志の間柄だ。

「風葉の身たもちがたく、草露のいのちきえやすし」何時死王の手にへだてられるかわかったものでない。無惨にも一方が欠けてしまうと、一方はその親愛の対象を失って、絲の切れた紙鳶のよう、やるせない情緒のみが綿々としてのこる。

「いたましきかな、まのあたり言葉をまじえし芝蘭の友、いきとどまりぬれば遠くおくり、あわれなるかな、まさしくちぎりをむすびし断金のむつび、たましい去りぬればひとりかなしむ」

「ひとりは死し、ひとりは生じ、たがいに哀愍し、恩愛思慕して憂念結縛し、心意痛著し、たがいに相顧恋す。日を窮め、歳を卒えてとけやむことあるなし」

こうした惨劇は人生いたる処で演出されて、誰も彼もその衝にあたらずにすますことは出来ない。

一一、かねての覚悟はどこえやら

生者必滅、会者定離とは、誰しも心得顔でいることだがいよいよほんとに自分が死ぬか、最愛の者が死ぬかという段になると、かねての覚悟はどこへやら、諦めていると思っていたことが、一向あきらめられていなかったのか、今更のように周章して四方八方にげ腰をもとめても、百計のつきたとなった上は、万斛の恨を呑んで、死魔のなすままになるよりほかしかたがない。実にたまらなくなさけないものは人の世だ。

一二、欲求の無限性

この事例に照らして見てもよくわかる。私達の欲求は、物に対すると、人に対すると、はた自分自身に対するとを問わず、本来無限無窮の展開性をもっている。

生命ばかりに限らない、その外のものでも、いやしくも不足をみたすに足るものは、一つのこらず欲しいのが私達の性分なのだが、そうみながみな得られないから、仕方なしにあきらめるとしているだけのことで、本統にあきらめ

られているのではない。

「煩悩深くして底なし、生死の海ほとりなし」とは、欲求の無限性から必然的に約束される私達の実相を、すこしの誇張もなく道破した金言だ。

一三、レルナの水蛇

対人関係の思うようにならないもの、自然の障害を除いては畢竟、自分の心のあつかいが思うようにならないのが主因で、一体自分の心ほどあつかいにくいものはない。

諸の善をしなくてはいけない、諸の悪をしてはならないとは百も承知をしていながら、持ったが病のわがままは、なかなか云うことをきいてくれない。とかく自分に都合のよいことばかりしたがる。おさえればおさえるほどますます反撥する。

一の首を切れば二つになり、二つ切れば四つになる、切れば切るほど倍になる。レルナの沼に棲んだという多頭の水蛇こそ、私達の根性そのままの象徴だ。

一四、迷から迷へ

悪から悪を重ね、迷から迷に入って行く、それは私達の持前から出てくる当然の帰結だ。私達は気にかけようがかけまいが、この成行を如何ともすることは出来ない。泰山をわきばさんで北海を越えるのが可能であっても、心を制し身を端すのは不可能だ。どんなに踏張ったところで、外は賢善精進の相を現じて、内に虚仮をいだく型から出ることは出来ない。

「自分自身と戦うのが一番むつかしい戦で、自分自身に打勝つのが一番見事な勝利だ」というが、果してその言葉通り行っていける人があれば、それはもう凡夫じゃない、煩悩を断じ尽くしてさとりと開いたものだ、仏そのものなのだ。

一五、究竟の棲家

欲求は大海の浪だ。一つすぎるとまた一つ、それからそれとしきりなく起ってくる。一々の欲求をみたそうとするのは底なしの袋にものを盛るようなものだ、入れても入れても際限がない、のみならず、入れるものすら獲られないことが多い。

生命のあらん限り、終にみたされるときのない欲求を追うて行くのが私達の生活だ。

そしてついにどうともしてみようのない、強烈な欲求につかまったが最後、そこで行詰ってしまうのが私達のさだめだ。絶望の渕は私達の究竟のすみかなのだ。

『今この娑婆世界は躭玩すべきことなし。輪王の位も七

宝久しからず、天上の楽みも五衰はやく来る。乃至有頂も輪廻期なし。いわんや余の世人をや。事と願とたがい楽しみと苦しみと倶なり。富める者未だ必ずしもいのちながからず、いのちながきものいまだ必ずしも富まず、或は昨日は富みて今は貧となり、或は朝に生れて暮には死しぬ、故に経には出息は入息を待たず、入息は出息をまたずと云えり。ただ眼前に楽しみ去りて哀しみ来るのみならず、また命終にのぞみて、罪に随いて苦に堕つ』

〈往生要集〉

一六、解脱の道、其一

このたまらない境涯から脱れるにはどうしたものだろうさしあたり二つの道があるように見える。

絶大の力を具足して、あらん限りの欲求を片端からみたして行くのが其一。心を無漏清浄にたもって穢わしい欲求そのものが、てんで起って来ないようにするのが其二つだ

前者は例えば盗賊の闖入するにまかせて、望み次第の財宝を取らせようというもの。後者は盗賊の入る隙間のないように、厳重に心の門(かんぬき)をかけようというのだ。

しかし、力に限りがあっては、限りのない欲求の相手は出来ない。全智全能の主体とならない限り、第一の道の迦秦の始皇や、漢の武帝が不老長生の薬をもとめさせたなどは、正気の沙汰とも思われない話のようだが、世間にはこれに似た図が乏しくないから驚く。自分は死なぬものかのように思ってるとしか思われない所行のある人は皆それだ。現に財産があって自由のきく人人には、知らず識らずここに出る傾向が特に多いかとおもわれる。

一七、解脱の道、其二

第二の道は、奮発次第で迦れば迦れそうにも思えるが、その実むつかしさは前のと同じだ。

世をいとい山に入る人山にてもなお憂きときはいずち行くらん。心が穢れに染まないようと、かたがた錠をおろしたところで、もともと私達の心そのものが、煩悩の塊ときているのだから仕方がない。煩悩の塊から煩悩を取って除けようというのは、瓦を玉に磨きあげようとする愚さとえらばない、泥でよごれた下駄を泥水で洗っても、とても奇麗になりっこない。

むかしこの道を真剣になって迦ろうとした人は、甚だすくなくないものであったらしいが「恩愛はなはだ断ちがたく、生死はなはだつきがたし」で、大方は、早晩破滅の転機に逢着して、狂瀾の押寄せるような欲求に翻弄されて、岳山の崩れかかるような欲求の下敷になって、粉砕されて

しまって、無事に目的に到着した者はすくなかったにちがいない。

一八、身のなる果

いわんやさほどの奮発もなく、うろうろしていたり、又はそんな問題は一向念頭にも浮ばないで、うっかりぼんやりくらしていた人が、みたされない強烈な欲求に衝きあたって、鷲につかまれた雀、蛇ににらまれた蛙のように、さっぱり動きがとれなくなると、急にあたふたして藻掻きに藻掻き、苦しみに苦しむ。が今更にどうにも追付く話でない。そんならここで百年目と観念して、ほんとに諦めることが出来るかというと、それも出来ない。

「悲しいかなや人の身の、なきなぐさめをたずねわび、道なき森にわけ入りて、などなき道をもとむらん」

いかんともしてみようのない窮境におちいりながら、あきらめることすら出来ないとは、何たる悲惨ななり行きだろう。

「いたるところに余の楽しみなしただ愁歎の声をきく」

そして、これが他人事でない、現に私達の身のなる果としたならば、恐ろしさ、はかなさにとても安然として居られるわけのものでない。

救　済（如　来）

一、王后、韋提希の願求

世にめずらしい仁君、ビンバシャラ王を夫にもち、何一つ不足のない生を享楽し、世は楽しいものばかりと思っていた韋提希夫人が、父王を幽閉して自ら王位に即こうとした生みの子の太子阿闍世のために、自分までも王宮深く押しこめの身となり、歓楽の天辺から、哀傷のどん底につき落とされ、つくずくと火宅無常のはかなさを思い知って、身も世もあられぬ悲しさに、雨とそそぐ涙ながらに、はるかに霊鷲山に向って、合掌稽首、釈尊を拝し奉って一心に救いを求めた。

夫人はやがて礼しおわって頭をあげると、思いきや、釈尊は早くもすでに現前していられる。かつ驚き、かつ喜んで、瓔珞をかなぐりすて、からだを土の上に投出して、釈尊に向い

「一体私には、むかし何の罪があってこんな子が生まれたのでございましょう。罪と穢れと醜さにみちみちている世の中は、ほとほといやになりました。未来はどうぞこんなあさましさをみたり聞いたりしないところへまいりとうございます。どうぞ憂悩のない清らかなところを教えていただきたいとうございます」とお願いした。

二　釈尊出世本懐

すると、釈尊が眉間から光明を放ちたもうと見てあると十方諸仏の国土が悉くその中にあらわれた。夫人は恍惚として見とれていたが、やがて釈尊に向って

「どの国土にも清らかな光がみなぎっていられますが、あの阿弥陀仏の御国こそはまた格別でございます。どうぞ彼処へ参りたいものでございますが、どうしたらそうさせていただけるでございましょう」とお尋ねにおよんだ。

釈尊はこのたずねを待ちかまえていられたもののごとく即ちにっこりと微笑ませたもうたのも道理、今こそ出世の本懐をのべたもうべき機縁がここに熟したのであった。

その時釈尊は夫人に告げたもうよう、「御身は知らずにいられようが、阿弥陀仏は遠いところにいらせられるのではない。今御身ならびに一切凡夫のために、極楽に生まれる法を説いてきかそう」と諄々として説き出されたのが観無量寿経一巻で、これは、表に方便として定善十三観、散善三福九品の観念、道徳の行業を説かれた裏に、真意として「念仏成仏これ真宗、万行諸善これ仮門」と知って、「自力のこころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば真実報土の往生をとぐるなり」との旨を示されたものだ。

三、獲三忍

夫人はこのお教を聞くなり、長夜の夢からさめたような廓然とした気分になった。今の今まで胸一杯にとじていたもだえは烟と失せ霧と消えた。これまでついぞ覚えたことのないたのもしさ、よろこばしさが身に泌みて、他力摂生の御慈悲が心の奥底まで徹到するのを覚えた。

釈尊出世の本懐は、こうして見事に達成された。

夫人は心想羸劣の凡夫として、即得往生の先駆となった而して「本願を信じ念仏を申さば仏となる」と説いてある「他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教」は端的に事実の上に顕示された。

四、親　心

水に溺れ火に焚かれる者を見ては、それが日頃憎らしいと思う仲であっても、死ねばいいと呪う程でない限りは、一助けずにはいられないのが人情だ、がんぜない嬰児が、轟々と汽車の近寄ってくるのも平気で、線路の内で遊んでいるのを見ては、どうしてそれを抱き出さずにいられよう。

ましてそれが我が一人子であるとしたら、我身をすてても助けずにいられないのが親心だ。

五、如　来

「如来一切のために常に慈父母となりたまえり。まさにしるべし、もろもろの衆生は皆これ如来の子なり」とは阿闍世王が獲信の暁、まっさきに吐露した仏徳讃嘆の叫びであった。

罪悪深重、煩悩熾盛の自性から、生死の境涯に沈みきって浮む瀬のない私達を、一人子のようにみそなわし、わが身を賭けても救ってやりたい、迷を転じて悟を開かせてやりたいとの、やるせない願望に駆り立てられて、わざわざ本覚の境界から、悲智円満の御相をあらわして、信仰の対象となって下さったのが阿弥陀仏で、無碍絶対の大慈悲がすなわちその本体だ。

無明の大夜をあわれみて法身の光輪きわもなく
無碍光仏としめしてぞ安養界に影現する

六、因果

さて阿弥陀仏は、どういう方法で私達を救おうとせられたか。善い因は善い果を結び、悪い因は悪い果を結ぶ。瓜の種には茄子はならぬ。それに何の例外があろう。

極悪最下の凡夫の種から、極善最上の涅槃の果を結ばせようとは、悪臭紛々たる伊蘭の種子から、芳香馥郁たる旃檀の樹を生やそうというのだ。何たる脊理な思付きだろうちそれだ。

烏に鵜の真似をしろと云ったら溺れてしまうにきまつてる。牡牛のように大きくなろうと、しきりに腹をふくらます蛙は、はじけてしまうにきまつてる。

煩悩具足の凡夫と私達の本性を見抜かれた如来は、私達の力で作る善根功徳を因として救いあげようとは仰しやらぬ。出来ない相談を持ちかけられるのでは、五劫思惟の甲斐がない。

九、因位の経綸

煩悩具足の凡夫が、否でも応でもたすからずにはいられないように、思案にかさね、工夫に工夫を積まれた法蔵因位の経綸を、唯信鈔によってうかがって見ると、「微妙厳浄の国土をもうけんと願じて、かさねて思惟したまわく、国土をもうくることは、衆生をみちびかんがためなり。国土たえなりというも、衆生うまれがたくば、大悲大願の意趣にたがいなんとす。これによりて往生極楽の別因を定めんとするに、一切の行みなたやすからず。孝養父母をとらんとすれば、不孝のものはうまるべからず。読誦大乗をもちいんとすれば、文句を知らざるものはのぞみがたし。布施持戒を因とさだめんとすれば、慳貪破戒のともがらはもれなんとす。忍辱精進を業とせんとすれば、瞋恚懈怠のたぐいはすてられぬべし。余の一切の業みなまたかくの如し。これによりて一切の善悪の凡夫、ひとしくうまれ、ともにねがわしめんがために、ただ阿弥陀の三字の名号をとなえんを、往生極楽の別因とせん云々」とある。

多聞浄戒えらばれず　破戒罪業きらわれず
ただよく念ずるひとのみぞ瓦礫も金と変じける

十、選択本願

「難行の陸路をことに悲憐したまい、易行の大道を広く開示したもう」ああでもない、こうでもないと、不向きなものを選び捨て、相応わしいものをより取って、凡夫の柄にはまるよう、繊細な斟酌を施した挙句、ようよう仕揚げられたのが、所謂選択本願で、本為凡夫の仏心の結晶、大慈大悲の親心のかたまりがこれだ。

超世無上に摂取し　選択五劫思惟して
光明寿命の誓願を　大悲の本としたまえり

十一、若不生者の誓

「罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんため」の選択の本願には、若不生者の誓と云って、もしこの願がかなわずに衆生が仏となれないならば、自分も仏とはなるまいと、自他の成仏を不可分的の連帯とした条件がついている。こ

七、加威力

朽木は雕るべからず、糞土の牆は朽るべからず。手のつけようもない悪いものが、そのままひとりでに転化して、絶対完全の域に進むというなら、それはいかにもつじつまのあわない話だろう。が、しかし、他から加わる威力に因つて、しかく転成するのだとすれば、それは必ずしもあり得ないこととは云えまい。朱に交われば赤くなる、いざりも乗物に乗せてもらえば、千里万里の遠きにも、やすやす達することが出来る。

さよう、阿弥陀仏はその乗物を工夫されたのであつた。そしてその乗物というのは、つまり私達のひとり歩きの出来ないいざりであることを憐ませたもう如来大悲の力に外ならないので、弘誓の船と云い、大悲の願船と云い、生死大海の船筏、本願円頓一乗などというのが即ちそれだ

生死の苦海ほとりなし　ひさしく沈めるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける

八、五劫思惟

沈没した船を引上げるにも相当な工夫がいる。曠劫よりこのかた、常に沈み常に流転して、出離の縁のさらにない私達をたすける工夫をこらされた際は、定めて思案にあまらせられたことであろう。五劫思惟の御苦労というのが即

れまた実に一切の慈父母として、身を挙げて活ける犠牲としたもう如来無蓋の大悲の顕彰といただくの外はない。

そもそも如来が私達衆生を憐れまれるのは、一体衆生というものは、それぞれに業の袋を背負っていて、それがために苦しんでいる可哀想なものだと、大雑把に推量される位の、なまやさしいことではない。

「一切衆生異なれる苦を受くるも、悉くこれ如来一人の苦なり」で、何人子供があつても、その一人一人の病が、ひしひしと親の一身にひびくように、私達衆生の一人一人の苦しみは、一一瑞的に如来の御心に応えて「一子のごとく憐念」されるのだ。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と聖人がいつも仰しやったのは、蓋しこの実相に深く感激していらせられてのこととうかがわれる。

縦令一生造悪の　衆生引接のためにとて
称我名字と願じつつ　若不生者と誓いたり

十二、兆載永劫の修行

超世の願を建てられた如来が、それを成満させるため、「仮令身を諸の苦毒の中におくとも、我行は精進にして忍んで遂に悔いじ」と、天地もために感応した至純至誠の心を以て、かぎり知られぬ永い間、菩薩の行を修めたもうにあたり、「一念一刹那も清浄ならざることなく、真実ならざることなく」「欲覚、瞋覚、害覚を生せず、欲想、瞋想害想を起さず」「勇猛精進にして志願倦むことなく」無量無辺の功を積み、徳をかさね、その恵利をことごとく衆生に廻向せられるのが、これぞ所謂、兆載永劫の修行で、その〆高がすなわち阿弥陀の御名だ。

兆載永劫の修行は　阿弥陀の三字におさまれり
五劫思惟の名号は　五濁のわれらに付属せり

十三、絶対無碍

私達は、あくまで自分の力でおし通そうとする、自分のいざりであることには気がつかない。従って如来の大願業力に乗托するなどとは思いもよらない。それが私達の本性だ。

如来は、私達がそれで行詰まるのを見抜いて居られる。そしてやるせない矜哀から、常住不断に、清浄、真実、至誠の心を以て、私達にむかって居て下さる。私達がそれにすこしも気づかずに居ようが、いくらか気がついていながら頓着すまいが、疑おうが、誹ろうが、おしのけようが、踏みにじろうが、其他どんなだいそれた態度に出ようが、怒らず、呆れず、いとど憐れみいつくしまれるばかりで、どこどこまでも見放そうとされない。

これが無碍絶対の大慈悲というもので、私達は早晩この大御心のまことにほだされて、わが力をなげうたずにいられなくなる。

兆載永劫の修行とは、遠い遠いむかしにあったこととばかり思って居ては勿体ない。現に恩しらずの私達に対して忍んで遂に悔いたまわぬ如来の態度がそれなのだ。

名号不思議の海水は　逆謗の屍骸もとどまらず
衆悪の万川帰しぬれば　功徳のうしおに一味なり
無碍光仏のひかりには　清浄・歓喜・智慧光
その徳不可思議にして　十方諸有を利益せり

信仰（仏凡一体）

一、自然の牽く所

地上の物が地にひきつけられるのは、地の引力の然らしめる所で、自然のことだ。悪業煩悩の塊が、輪廻の迷路にひきつけられるのは、業因の然らしめるところで、これまた自然だ。その地獄一定の私達が、弥陀の弘誓にひきつけられて、無碍絶対の大慈悲にほだされずにいられなくなるのは、如来選択の願心から発起するところで、これこそ自然の中の大自然だ。

地球の引力が秋毫の微もあまさずひきつけるように、凡そ生きとし生けるものは、早晩、尽十方無碍光の大自然力にひきつけられないものはない。それはただ已・今・当の問題であって、有無の問題ではない。

智慧の光明はかりなし　有量の諸相ことごとく
光暁かぶらぬものはなし　真実明に帰命せよ

二、信楽開発

さようで私達はひきつけられるのだ。

赤坊が初中終、母親の手しおにかかって育ちながら、はじめの間は何にも知らず、若干の月日がたつに従って、おぼろげに母親の顔を見覚えるようになると、それからは日増しに慈愛のふところにひきつけられて、片時もそのそばを離れられなくなると同じように、久遠劫の昔から苦悩の旧里をさまよって来た私達も、自然のはからいに催されてどこどこまでも私達に同応して、私達の苦悩を苦悩としたまう大慈大悲の親心のましますと聞けて、かたじけなさ、尊さ、嬉しさが、しみじみ感じられるようになってくる。

十方諸有の衆生は　阿弥陀至徳の御名をきき
真実信心いたりなば　おおきに所思を慶喜せん

三、大悲無倦

点滴が岩をうがつように、長時不断の火と燃える如来真

実の大悲には、さすが厚い煩悩の氷も菩提の水と溶けずにはいない。空気が地球をつつんでいる以上、私達は――知ろうが知るまいが――気層の外へ出ることは出来ない。よしやそれが可能だとしても、私達は――思おうが思うまいが――到底如来の慈光からのがれることは出来ない。何故ならば如来の慈光は、横に十方を通じ、縦に三世を貫ぬいて、私達を囲繞し、照曜しつつあるのだから。

観音　勢至もろともに　慈光世界を照曜し
有縁を度してしばらくも　休息あることなかりけり

四、光明の縁

夜のあけるのは日が出るからだ。親心のありがたさが、つくずく思い知られるのは、子に孝心があるからではない親心のあたたかみが、ようよう子の心に染み透るからだ。己に出でて己にかえる四囲の状況に追詰められて、こらえられない淋しさ苦しさに悲泣する時、同じ思いに雨涙したもう如来のやるせない思召が、一念私達の心の底に感応すると、ここに忽ち未曽有の心境が展開されて、あだかも電流が物体に通じたと一般、光を感じひびきを感じ、熱を感じ力を感じ、心広く体ゆたかに「今宵は身にも余りぬる」嬉しさに「ただほれぼれと如来の御恩の深重なること」が身にしむばかりだ。これが「摂取不捨の利益」にあずかったというものだ。

釈迦弥陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を　発起せしめたまいけり

五、奥山の栞

ドイツの俚諺に「忘恩は世の返し」とあるのはよくうがったものだ。その当否を確かめるには、あらためて世の有様を詮議するに及ばない。銘々の心が辿って来た跡を振返ってみればすぐわかる。実際私達は、恩を恩とも思わずにいるばかりでない。時として返すに仇をもってすることさえある。けれども姥捨山の昔話にある年寄った母を捨てに行った不孝な子も、子のかえるさのたよりにと、道すがら枝を折りながら行く母の心遣には、さすがに親のなさけを思い知らずにはいられなかったように、名利の山に踏迷う具縛の凡衆をみちびいて、涅槃の門に入らしめようと、手に手を尽して下さる矜哀の善巧には、いかにしぶとい私達も、いつかは信心の智慧にうなずかされて、自身の罪悪の深く、如来の御恩の高いことを、思い知らずにはいられなくなってくる。

智慧の念仏うることは　法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば　いかでか涅槃をさとらまし

六、無眼無耳

現今の心理学界で、智能啓発の上の奇蹟と見られるヘレンケラー女史が、その生後僅かに二十ケ月目に、早くも視力と聴力を失って、盲者聾者、従ってまた唖者として、暗黒無声の境涯にそだちながら、遂に最高学府の教養までも終えて、立派な淑女となりおおせられたのは、八つの時から傍を離れず、親身も及ばぬ丹誠をこらして、導いてくれた家庭教師アネ、サリワンのお蔭なのだ。「勿体なや祖師は紙衣の九十年」無眼無耳の私共の教化のために、生涯を捧げて下さった聖人の御苦労が、これにつけてもしのばれるではないか。

十方世界を照曜する弥陀仏日の光明にはぐくまれて、無明煩悩の闇がようようにうすらいで、所謂宿善開発の暁、選択の願心に信順して、念仏する身となれるのは、一から十まで如来のたまものの、渾身煩悩のかたまりである私達の方から持ち出す分とては微塵もない。全く仏智不思議のはたらきによるのだ。

信は願より生ずれば　念仏成仏自然なり
自然すなわち報土なり　証大涅槃うたがわず

七、信心の下賜

蕃界の土人が官の勧めで、都見物にのぼるには、着のみ着のまま手ぶらでよい。乗車乗船の切符までただ貰える。如来が私共衆生を、極楽無為涅槃界に招かれるについては、本来無一物と見てとられた私達に向って、何一つ土産に持って来いと注文されないのみか、本願に乗托するにならない信心までもあてがわれる。

「速に寂静無為の楽に入るには、必ず信心を以て能入とす」衆生の成仏のために自分の成仏を賭けられた大慈大悲の仏心と、煩悩成就の凡情とは、如来からたまわる信のまことに貫かれて、不可分的に結びつけられ、金輪際はなれる気遣いのないものとなる。丁度河水の大海にそそいで同一塩味となると異らない。

尽十方無碍光の　大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば　智慧のうしおに一味なり

八、仏凡一体

仏凡一体、絶対と相対の融合、有限と無限の一致などいう宗教の極致は、こうしてここに実現される。

世にさまざまの宗教もあろうが、救われる衆生が助かることに因って、救う教主もたすかるという誓願の持主は、弥陀一仏をのけて他にあるまい。これ実に如来の無上法王たる所以で、執持鈔に

「名号につきて信心をおこす行者なくば、弥陀如来摂取不

捨のちかい成ずべからず。弥陀如来の摂取不捨の御ちかいなくば、また行者の往生浄土のねがい何によりてか成ぜんされば本願や名号、名号や本願、本願や行者、行者や本願という、これこのいわれなり」とあるのも、畢竟機法一体の必然的対応を指摘したものに外ならない。

五濁悪世のわれらこそ　金剛の信心ばかりにて
ながく生死をすてはてて自然の浄土にいたるなれ

九、金剛不壊の眞信

自分のかんがえでつち上げたものは、そのかんがえの移るにつれて動いて行く。時々の気分に影響されるような信心なら、それは偽物に違いない。本当の信心はこちらから出るのではない、向うから注ぎこまれるのだ。如来が常住にして変易することのない限り、そのたまものなる信心も、一旦決定したが最後、金剛不壊だ。どんなことがあつても終生かわる筈がない。こう信仰の確立した状態を正定聚不退転という。

幸にこの境に住することとなれば、往生の業事はすでに悉く成弁されたもので、そうした人は最早凡夫にして凡夫ではない。単なる凡夫としてはすでに命の終つたもので、必ず仏となるにきまつてる点では、必定の菩薩と同格だ。この意味ではすでに生れかわつたものといえる。獲信の刹那を界として、前念命終、後念即生というのはこのことだ

金剛堅固の信心の　さだまるときをまちえてぞ
弥陀の心光摂護して　ながく生死をへだてける

十、信心と念仏

一陽来復して、雪や氷が溶けかかると、山川に潺々の音をきくように、胸一杯にはりつめた煩悩の堅氷が、信楽開発の法悦に、他力の信水と溶けそめて、声に出たのが念仏だ。

内にありがたいと思うこころがきざせば、外にありがたいとさけぶ声が出ずにはいられない。阿弥陀仏に帰命せよとの本願招喚の勅命が聞えた以上は、その反応として、阿弥陀仏に南無したてまつると、声に出るのがあたりまえだ。然り、念仏は自然の声だ。自力の行とし善として他力救済の資に供する功徳なのではない。

十一、信心の発露

信心と念仏とは別々のものではない。念仏は信心の発露でなくてはならぬ。弥陀の御恩が深重なることの思われるにつけ、報恩謝徳の念が、言葉となり声となつて、口にあらわれたものでなくてはならぬ。

この消息は、ひとり絶対他力の信を体験した人にして、

はじめて会得することが出来るのみだ。空気が鼻口を通じて気管から肺臓に達したあとは、今度は逆に気管から鼻口を通じて、外に出なければならないように、内に他力の信心を恵まれた上は、それが他力の念仏となつて口に出ずにはいない。念仏は信仰に生きる人の気息だ。「ひとえに他力にして自力をはなれたる故に行者のためには非行非善なり」とは、単なる論理的の仮定ではない、文字通りの体験なのだ。

「徳号の慈父ましまさずば、能生の因かけなん。光明の悲母ましまさずば、所生の縁そむきなん。能所の因縁和合すべしといえども、信心の業識にあらずば、光明土にいたることなし。真実信の業識、これすなわち内因とす。光明名号の父母、これすなわち外縁とす。内外の因縁和合して、報土の直身を得証す」　（教行信証）

十二、自然と作善

私はどうも概して書家の書を好かない。これに反して、小学一年生の書いた字を見ると、いつもすくなからず感心させられる。前者は一見美事であるが、後者の天真爛熳、すこしもはからいの交らないのとくらべて、いかにも技巧を弄したいやみのあるのをまぬがれない。

他力本願に信順して、至心信楽、おのれを忘れて称える念仏は、罪を滅ぼし功徳を積む資料としての念仏とは雲泥の差がある。一は自然であるのに、一は作善だからだ。千羊の皮は一狐の腋にしかず、自力の念仏百万遍は、他力の称名一遍にだに及ばない。

真実信心の称名は　弥陀廻向の法なれば
不廻向となずけてぞ　自力の称念きらわるる

十三、自然の念仏

生死に輪廻して火宅を出られない私達が、行にもあらず善にもあらず、有漏（ぼんのう）の穢身そのままで無生忍を体得して、臨終一念の夕、大般涅槃を超証する身の上となられたのは「ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり」と思い知つて、旦つこの往き易くして人なき門に入るのに　ただ一つなくてならない門鑑を手に入れることが出来たからだ。その門鑑とは外でない、他力の信の一念だ自然の念仏だ。「ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なること、つねに思い出し」まいらせて申される念仏がそれなのだ。

弥陀の名号となえつつ　信心まことにうる人は
憶念の信つねにして　仏恩報ずるおもいあり

十四、光るものは皆黄金とはきまらない

光るものはみな黄金とはかぎらない。口に称える念仏は必ずしも他力の信の発露とはきまつていない。これで心を清めよう、罪を消そうという念仏は、いわゆる自力修善の一種なので、本願に相応する行ではない。

「真実の信心は必ず名号を具す、名号は必ずしも願力の信心を具せず」

肝腎かなめの信心がかけていると、弘誓の船に乗込もうとしても、足が自力にほだされて、地に引着いて離れないしたがつて大悲の風にまかすという決定的の態度に出ることが出来ない。

弥陀大悲の誓願を　ふかく信ぜんひとはみな
ねてもさめてもへだてなく　南無阿弥陀仏を称うべし

十五、一心帰命

他力摂生の思召が聞えたからは、自力をさしはさむ余地はない。汽車に乗込んでしまえば、もうかけだすに及ばない。難行陸路のわがはからいがやまないのは、易行水道の大願業力に乗ずる決定がついていないからだ。

天親菩薩は「世尊、われ一心に尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」と告白された。「天親論主は一心に、無碍光に帰命す、本願力に乗ずれば、報土にいたるとのべたもう」「論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩悩成就のわれらが、他力の信とのべたもう」

天親の親と、曇鸞の鸞とを取つて名告らせられた聖人が「よき人の仰せ」に聞かれた「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とは、大小の聖人、軽重の悪人、すべてに通じて、信仰の始めであり、終りでなくてはならぬ。これより足りないところのあるのもいけないし、余計なものひつついているのもいけない。

十六、無義爲義

ただ念仏の一行に摂取の因をまとめた如来選択の願心が取柄のないこの私をあくまで見捨てぬ御真実といただけて大悲の矜哀と罪悪の自覚と、ぴつたり出遭ッたところ、これがいわゆる函蓋相応の境地で、不断煩悩、得涅槃の水ももらさぬ妙締は、ここに確認されると同時に、現在摂取の光明裡に自適することが出来るようになり、わがはからいというものは、根本的にその存在の理由を喪失して了う。

「念仏には無義をもて義とす」とは、この成行を言つたもので、如来の慈悲に目がさめて、私のはからいのやんだところが、そのまま如来の御はからいだというこころだ。

この御文は、実に信心の真偽を試めすはかりで、このはかりにかけて均衡を得るものは合格、そうでないものは不合格と、きつぱり極めがついてしまうのだ。

「引鉄は心で引くな手で引くな」というのが射撃の秘訣だそうだが、信仰もそんなもので、是非とも信じなくてはならないとりきんでみたり、わが称える念仏で往生しようと励んだり、心の上や行の上に、ぎこちない力瘤の見える間は、まだまだ自然の妙境とは相去ること遠しと云わなければならない。

「寒夜に霜のおくように」如来の御恩が身に泌みて、称えずにいられなくなる念仏こそは、発して正鵠を失わざるものとは言えるのだ。

聖道門のひとはみな　自力の心をむねとして
他力不思議にいりぬれば　義なきを義とすと信知せり

十七、廻心

うばたまの黒闇の中をてさぐりし、しりごみしているうちにパッと電灯のついたようなのが、お慈悲にめざめたときの感じだ。

深渕にのぞみ、薄氷をふみながら、戦々兢々、魂も身にそわず、身体もすくんで、こわばつてしまうかと思われるなかで、不図、そうした自分をやるせなく憐れとみそなわして、このたびこそは落とすまいと、あくまで見放したまわぬ絶大の力がましますのだと気がついて、その広大の同情に抱擁されて、もがく力の抜けた刹那が、わがはからいのやんだとき、一生一度の廻心なのだ。

さきにはわがはからいが行詰つて、手も足も出なくなってしまったのが、今は如来の慈悲に腹ふくれて、わがはからいの手足を投げ出した相だ。

無明長夜の灯炬なり　智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり　罪障重しとなげかざれ

十八、自覚

善いことをしないでは助かるまい、悪いことをやめないでは救われまい、智慧をみがき学問を究めないでは、本統のところがわかるまい。ああしないではなるまい、こうしてはいけないと、わがはからいをさきにたてて、それが思うようにいかないので、結局行詰って悶えるのは、自分にまだひとかどの取柄があると思ってるからだ。

しかるにその実、何の取柄もない、善いことをしようと思っても出来ず、悪いことをやめようと思ってもやまず、抑えきれない欲求のひきずるままになッている、繋縛の凡夫のはかなさを、かねてしろしめしての御手当と、他力の悲願に目がさめたとき、はじめて自力の力瘤がとれて、羽目をはずしてくつろぐことが出来るのだ。

願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば　散乱放逸もすてられず

相続（信的生活）

一、絶対の価値

「曽無一善、唯知作悪」の私達を、あきれず捨てず、若不生者の誓の手に、むずととらえて離したまわぬ無碍絶対の大慈悲に、さすが我慢の頭も下り、言亡慮絶、おそれいったところ、これぞ真心徹到のすがたで、畢命を期として念仏相続する利他金剛の信楽はここにその端を発し、人生生活の絶対安定の基礎はここに確立し、愛欲名利の対象たる何ものをもってしても、替えることの出来ない絶対の価値ある心境は、豁然としてここに展開する。

二、価値の転換

絶対の価値ある心境がひらかれた以上は、諸種の欲求に対する値ぶみが、おのずから従来のと違って来なければならない。かって愛欲だの名利だのが、底の知れない力をもって独占的に私達を引摑んで暴威をたくましくしたものが今は必ずしもそうばかりではないといえるわけは外でもない、私達は以前とちがって、今では、何より大事な信楽の持主となってるからだ。

「そのかみ邪見におちたる人ありて、悪をつくりたるものをたすけんという願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて往生の業とすべきよしを云いて、ようようにあしざまなることのきこえそうらいしとき」これをいましめられた聖人の御消息をよく味わうと、信前信後の価値の転換から生ずる生活の態度の推移がよくうかがわれる。

世をいとうしるし

「まずおのおのの昔は、弥陀の誓をもしらず、阿弥陀仏をも申さずおわしまし候いしが、釈迦弥陀の方便にもよおされて、いま弥陀の誓をききはじめておわします身にて候なり。もとは無明の酒に酔いて、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒をのみこのみめしおうて候いつるに、仏の誓をききはじめしより、無明の酔もようようすこしずつさめ、三毒をもすこしずつこのまずして、阿弥陀仏のくすりを常にこのみめす身となりておわしましおうて候ぞかし。

しかるになお酔もさめやらぬに、かさねて酔をすすめ、毒も消えやらぬになお毒をすすめられ候らんこそあさましく候え。煩悩具足の身なればとて、こころにまかせて身にもすまじきことを許して、いかにもこころのままにてあるべしと申しあうて候らんこそ、かえすがえす不便におぼえ候え。酔いもさめやらぬさきになお酒をすすめ、毒も消えやらぬにいよいよ毒をすすめんがごとし。薬あり毒をこのめと候らんことは、あるべくも候わずとこそおぼえ候。

仏の御名をもきき、念仏を申して久しくなりておわしまさん人々は、後世の悪しきことをいとうしるし、この身の悪しきことをば、いといすてんとおぼしめすしるしも候べしとこそおぼえ候え。はじめて仏の誓をききはじむる人々の、わが身のわろく、こころのわろきをも知りて、この身のようにては、なんぞ往生せんずるという人々こそ、煩悩具足したる身なれば、わがこころの善悪をばさたせず、むかえたもうぞとは申し候え。かくききてのち、仏を信ぜんとおもうこころふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとい、流転せんことをも悲しみて、深く誓を信じ阿弥陀仏をもこのみもうしなんどする人は、もともこころのままにて悪事をもふるまいなんどせじと、おぼしめしあわせたまわばこそ世をいとうしるしにても候わめ云々」〔末灯鈔〕

三、当然の驚異

あらたにひらかれた信楽の境地が、さまで大事なものだとは平生意識されてはいないが、今汝を世界一の金持にしてやろう、末代までの誉ある人にしてやろう、汝にこのさき千年万年の寿命をやろう、そして絶世の佳人をあてがってやろう、ただそのかわり信楽の境を見捨てよ、といわれたとしたらどうかというと、まさかその間の取捨に迷うようなことはあるまいと思う。これとあれとは、到底同一の標準ではかることの出来ない価値だ。一は相対であり有限だのに、他は絶対であり無限だからだ。

古来幾多の殉教者に見る悲壮崇高な態度はこの見地からすれば、けだし驚異すべき当然だとも言えよう。

四、煩悩あっての信楽

横目竪鼻の人体をそなえている間は、他力の信を獲たのちでも、持前の煩悩はなくならない。「煩悩を断じなば即仏なり、仏のためには五劫思惟の願その詮なくやましまさん」功徳の水と溶けながらも、氷は矢張り氷なのだ。が、その氷の溶けて行く推移こそ即ち信楽の味わいなのだ。氷あっての水であり、煩悩あっての信楽だ。

浄土真宗に帰すれども　真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて　清浄の心もさらになし
罪障功徳の体となる　こおりとみずのごとくにて
こおりおおきにみずおおし　さわりおおきに徳おおし

五、気圧と水温

あぶない悪戯に夢中になって、人の制止をきこうとしない幼児も、母の乳房が眼に入ると、しかけたこともそのままにして、忽ちそれにとりつくように、三毒煩悩の悪魔に駆使されている私達も、仏智にめざめたお蔭には「よろず

のことみなもてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」としらせて貰って見れば、久遠の習気一朝に抜け難しとは云いながら、まさかこれまでのように、むきになってここを先途と悪戦する気にもなれまいではないか。片手に乳房をまさぐりながら片手に玩具をはなさぬよう、幾分遊戯の気味が注入されて来なくてはならないはずだ。

気圧の弱い高山では、湯はたぎっても温度はその割に高くない。

六、高楊子

武士は食わねど高楊子とすましていることの出来たのは一つはきまった祿をいただいて生活の基礎がきまっていたからだ。だから一旦扶持にはなれると、浪人しても武士は武士だが、切取強盗武士のならいと、前と正反対の態度に出るものもあったわけだ。

ただ世をいとえとあってはとてもいといきれる私達ではないのだが、現に甘露の法味に皷腹（満腹）して、生の安定の基礎がすわった半面には、幾分欲求に対して、恬淡な態度がとれるようになるのは、むしろ自然の趨勢といえようではないか。

七、轉化作用

公のみ私を忘る、などいう崇高な道徳は、聖賢の徒ならばいざしらず、明け暮れあさましい煩悩につきまとわれている私達のなかなかよくする所でない。

自分の腰かけている椅子は、自分の力ではもちあがらない。他力の慈悲に腹ふくれて、あてにならない婆婆がようようとわれだして執着の腰があがりかかると、ここに幾分良心の椅子を動かせる素地が作られるのだ。

それは自分の高潔な人格が然らしめるのではない。煩悩の衆流を智慧の潮に一味にする大信海の転化作用に由る。

尽十方無碍光の　大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば　智慧の潮に一味なり
無碍光の利益より　威徳広大の信をえて
かならず煩悩のこおりとけすなわち菩提の水となる

八、奸詐百端

とはいうものの省みて心の奥をみつめると、実に慚愧と歎嗟に堪えないものがある。

他力真宗を奉ずる身でありながら、真実の心とては更にない。外相は賢喜精進に見せかけても、内心は虚仮不実をもってみたされている。たまたま自分にも、こればかり純な利他の動機からやったと思われることがあっても、裏に

廻ってみると、様々のいやしい自利の衝動が尻押をしていないことはない。「奸詐百端身に満てり」いやしくも内省に徹底した人ならば、誰かこれを否定し得るものがあろう

蛇蝎奸詐の心にて、自力修善はかなうまじ
如来の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせむ

九、自然のことわり

信後の生活が、信前のそれと著るしく違うところは、自分の心の有様が浄玻璃の鏡にかけたように、まざまざと見え透く点にある。

「悪性さらにやめがたし、心は蛇蝎の如くなり」と曇った眼にも映ずるのは、恐らく弥陀の智慧をたまわったしるしとも見られよう。そして「まことに煩悩の興盛に候にこそ」と我ながら呆れ果てるなかから「かかる浅間しき身も本願にあいたてまつりてこそげにほこられ候え」と、とっくり安心させて貰えるのが信後生活の常態で、その結果、「わろからんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心もいでくべし」とあるように、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、それぞれ場合に応じた当為の心が起って来ようというのは、さきに云った大信海の転化作用に属することなのだから、私達自身の方では果して善い心が起ってくるかどうか、それは如来の御はからいにまかせまつるほかはない。もとより私達はそうありたいのは山山だが、しようと思えば出来ると信ずるには、余りによく我が身の程がしられているのだ。

弥陀智願の広海に　凡夫善悪の心水も
帰入しぬればすなわちに　大悲心とぞ転ずなる。

十、底力のある生活

あさましい心の陰影に驚かれるのは、一方に弥陀の心光のお照らしを蒙っているからだ。「本願にほこるこころのあらんにつけてこそ、他力をたのむ信心も決定しぬべきことにて候え」煩悩具足と信知して、且つ愧じ且つ傷むにつけ「他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけり」と、いよいよたのもしくおもわれる。

信後日常の生活は、時々刻々にこの気分をくりかえすことだ。「信心あさけれども本願ふかきが故に、たのめばかならず往生す。念仏ものうけれども称うれば定めて来迎にあずかる」意馬心猿と乱れ狂い、秋の空のように、猫の目のように、変転きわまりのない私達の心にも、如来からたまわった信心ばかりは変りはない。これこそ私達の唯一究竟のたのみの綱だ。私達は絶えずこの綱に引かれて心強い底力のある生活をさせていただくのだ。

清浄光明ならびなし　遇斯のゆえなれば
一切の業繫ものぞこりぬ　畢竟依を帰命せよ

きがとあ

さ庭辺に白萩が今を盛りと咲きほこつて池山先生の御忌月を告げてくれます。

わが庭の萩さかりなりここかしこ白き孔雀のむれいるがごと　池山先生詠

◇

今回は「絶対他力と体験」の先生の御著書から頂きました。この書は、独訳歎異鈔、意訳歎異鈔を出版されたあとで「私の生の記念として」出版されたものであります。

この書によつて、歎異鈔を読んで一応その意味は了解しても、日常生活の上に味わう上にその手引として出されたものであります。

近角先生はよく「絵をかくにはカンバスがいる。信仰があらわれるのはその実生活で、その実生活のカンバスをのけてはならない」と仰しやいました。教を鏡として自分の生活を照らし、自分の生活の中に教が光をさして来ることこそ、仏法者の中心生命であります。

さて本書のいたるところに、歎異鈔の何処かが原型をひそめて流れておりますのは、先生の信生活の流れはのこらず歎異鈔の水源池をくぐつて出ているのですから自然にそうあるのであります。但し非常に文章をきりつめて、大きな内容を数語で述べて下さつておりますので、ゆつくりとくりかえしてお読み下されば幸甚であります。

京都一道会御案内

時、十月廿九日（日）午後一時。

所、京都市右京区山田開町、浄住寺。

（道筋）

○京都駅より苫寺行バス終点下車。

○新京阪桂乗り換え、上桂下車。

池山先生詠

来し方の十年の冬をしのぶかなまた人生の春を迎えて

ものを思えばやるせなきまま思うこと思わじとこそ思いなししか

逢うてまた別るる日なり今日よりはまたの逢う日のめぐりそめける

一人いてよろこぶこえや明け易き

白道のかなたやいかに秋の風

白道のかなたにつづく紅葉かな

◇　◇　◇

御案内

◎　毎月第一、二、三日曜。午后一時半。一道会例会。

◎　毎月廿四日午前午后、教西寺法話会。

定価　半年　二百円（送共）
一年　四百円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　本田政雄
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十九巻第十号　昭和四十二年十月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可